

2024 優勝エッセイ賞

佳作 (GⅢ)  
受賞作

## 父の孤影

みなみ ひろゆき  
南浩之

受賞のことは  
応募作に書いた通り、今年のジャパンカップは枠連3-6を千円だけ購入して心静かにテレビ観戦しました。翌日、書店に行き優勝を開くと私の名前が。ウオツと声を出してしまい、興奮のあまり思わず2冊購入してしまっただけです。帰宅後、父の遺影に受賞作発表のページを見せ「あなたのおかげです」と報告しました。望外の評価をいただき感謝の念に堪えませんが、まだGⅢウイナーになったばかり。いつかGⅠが獲れるよう今後も精進する所存です。

プロフィール  
大阪府生まれ。広告代理店、通販カタログ出版社等を経て、退職後は派遣登録スタッフとしてストレスフリーな毎日を過ごす。趣味は競馬と釣り、家庭菜園。思い出の馬はセントシーザー。

父が馬券を買っていることは小学生時分から知っていた。

雇われ大工の父は土日も殆ど仕事で家におらず、月に一度あるかないかの休みの日曜は、朝から決まって馬券の買い出しに明け、昼過ぎに帰ってくると酒を呑みながらテレビの競馬中継を静かに観ていた。

競馬に興じる父を母は快く思っていなかったのだらう。子供をどこにも連れて行かんと競馬ばかりして、とよく愚痴っていたが私は酒臭い父と出かける気には到底なれなかった。競馬中継が終わる、普段の寡黙な父とは別人のような豪快な躰を立て、畳で仰向けに眠る姿を見て、酒呑みにはなりたくないとい子供心に思っていた。

父を徹底的に疎んじていた時期がある。反抗期だけが理由でないことは私自身がよく判っていた。

あれは中学生のときだったか、テンポイントがレース中に骨折し、その闘病中の容態が連日報道されていた頃である。

クラスの話題にもなっていたので、私もスポーツ紙を毎朝欠かさず読み、テンポイントの快復を祈っていた。しかし父は違っていた。日を追うごとに症状が悪

化していくと、「可哀そうに。早く楽にさせたらええのに」としきりに呟いた。休みの少ない仕事も、生活態度も、そして非情な考え方も。父のようにはなりたくない。そう思いながら長い期間、父を冷めた目で見ていた気がする。

二十歳の秋、自己都合で大学を中退した。退屈な講義が自分の将来にどう繋がるのか見えなくなり、悩んだ末に出した答えだった。

大学辞めるわ。そう告げたときの両親の反応が未だに忘れられない。

夕飯の後片付けを済ませドラマを観ていた母はポカんとした表情を見せたが、やがて眉間に皺を寄せ、一浪してせっかく入ったのにもつたいない、辞めて何するの、とまくし立てた。いつものように畳に新聞を広げ、背中を丸めて読んでいた父は、老眼鏡をずらして私を一瞥したが、何も言わず紙面にすぐ目を戻した。

大学を辞めたあと、就職先を探すこともせず、小さな印刷屋のアルバイトを続けていた11月の下旬だった。朝起きて居間に行くと、父から「馬券買うてきてくれへんか」と頼まれた。畳の上のスポーツ紙にはジャ

パンカップの文字があった。

当時は20歳を過ぎても大学生は馬券を買えなかった。そのルールを父は知っていたのだろうか。中退を止めなかったのは馬券の買いに行かせるためだったのかと疑ったのは、ずいぶん先のことであったが。

さすがにその頃は父への嫌悪感も薄れ、むしろ言動にも無関心だった気がする。バイトは休みで予定もなかったもので、二つ返事で引き受けた。父は8等分に切った折込チラシの裏に買い目を書き「5000円は電車賃や」と言いながら千円札2枚とチラシを私に手渡した。

梅田に場外馬券発売所があるのは知っていたが、詳しい場所までは知らなかった。知らないまま大阪駅のホームに降りると、予想紙を持った人が数人降りてきた。後について行くにつれて同じ風体の人々が次第に増え、その夥しい人の波に揉まれながら辿りついた先が梅田場外だった。

前列の人の買い目を伝える様子をまねて、チラシの裏に書かれた父の買い目を私は窓口の女性に伝えた。購入後に列から離れ、今度は自分の馬券を買うために再び列に並んだ。

東京10レース、千円ずつで。

316、318、618。

レースは自宅の自室で観戦した。逃げるカツラギエースが先頭でゴールを駆け抜け、ベッドタイムがシンポリドルフの猛追を凌いで二着に入った。鼓動が速まるのが自分でも判った。316、8110円。連勝式が粹連しかなかった時代では大穴だった。

初めて購入した馬券が的中しただけでなく、僅か3分足らずで月のバイト代の3分の2になった。当たったと喚きながら居間に向かうと、父は「おお、すごいな」と静かに笑った。いつも通りの様子から父はつきり外したと思っていたが「お前の当たり馬券と一緒に換えてきてくれ」と馬券を渡された。券面を見ると父もまた316を500円の中させていた。

その日以降、競馬の面白さにどっぷり嵌まった私は場外や京都競馬場に毎週足を運ぶようになった。「やっぱり親子やなあ」と母は眉を擡めたが、一切気にしなかった。自分ひとりで楽しむ後ろめたさもあり、仕事で馬券を買えない父には毎週土曜の夜に「買ってくるから予想して」と伝えていた。

日曜の朝、父のいない居間の卓袱台には買い目書かれたチラシと千円札が数枚置かれていた。私やがて定職に就き、結婚を機に実家を離れるまでそういう日曜が何年も続いた。

父の買い目を気にすることはなかったが、ある日、妙なことに気づいた。

どんな購入レースにも必ず316が書かれてあった。ジャパンカップで的中する前からなのか、それともの

中してからののか。

父の誕生日ではない。母や私の誕生日とも違う。316を買い目に入れる理由をいつか訊きたいと思っていたが、週末になると予想に没頭するあまりすっかり忘れてしまい、結局訊きそびれたまま父はこの世を去った。

3年前の秋、父は肺炎をこじらせて入院した。87歳だった。私が出たあと父は自分で馬券を買いに行くことは殆どなく、仕事を辞めてからは出かけるのが億劫になったのか、紙上で予想し、テレビでレースを観るだけだったと後から母に聞いた。

病院は嫌だ。早く家に帰りたい。新型コロナのため、電話でしか話せない母だけでなく看護師にもそう言い続けて手を焼かせたらしい。そして早く帰れるならと自らの意思で胃腸の手術を受けた。高齢のせいだろう、手術後は急激に衰弱し、やがて言葉も満足に話せなくなった。そして誤嚥性肺炎を発症し、最期は病室で息を引き取った。

父が亡くなる一週間前、私と母は病院の面談室にいた。直接面会することは禁止されており、モニター越しの面会だった。

モニターに映る父はすっかり痩せてしまい、掠れた声は出るものの何を伝えようとしているのかまったく判らなかつた。ただ、耳は聴こえるらしく、早く治して家に帰ろうなという年老いた母の呼びかけには何度も頷いた。

病院からの帰り際、母は「もう退院は無理やろうなあ」とぼつんと呟いた。私はふと、テンポイントのことを思い出した。早く楽にさせたらええのに。そう呟

いた父の気持ち、そのときようやく判った気がした。

初めて馬券を購入してからちょうど40年が経つ。

あれだけ疎んじていた父と同じように、いや、父以上に競馬好きになり、相変わらず毎週馬券を買い続けている。

酒もいつの間にか呑める口になった。ただ、呑むとすぐに眠くなる。酩がうるさいと妻に文句を言われる始末である。

週末に予想をしている姿を見た妻がいつも笑う。背中が丸まってずいぶんお年寄りみたいやよ、と。

居間の窓ガラスに映った自分の影を見る。背中を丸めて床に予想紙を広げる姿は、あの頃の父の姿そのままだった。

なりたくないと思っただけ思っていた父に、気づかぬうちに近づいていた自分がそこに映っていた。

酷暑が去り、短い秋が終わりを告げる頃、今年もまたジャパンカップがやって来る。

長期休養明けで前哨戦も使わずGI挑戦。そんなローテーションが現在の常識だと理解していても、未だに昔の非常識からの上書きができず、見当違いな穴馬券ばかり買い続けている自分には、馬柱をどれだけ凝視しても的中する自信はない。

今年も下手な予想を放棄して、粹連316だけを買うことを既に決めている。

40年前の父のように、一切興奮することなく、ただひたすら静かに、テレビの前に座りレースを観戦することを心に決めている。